名古屋女子大学
文学部 児童教育学科 講師
堀　祥子
Sachiko HORI

東京の美大時代、学内での卒業制作展示の風景より。手前2点が筆者作。卒業の規定は大きさが等身大以上の作品2点。苦しく長い制作期間は後の自信となった。

第23話「扉を開くのは誰だ」

「辞めるのは簡単、続けることは難しい」。美大時代の先輩が残した遺言のようなこの言葉を胸に、私は大学を卒業して社会に飛び込みました。私が東京の美大の彫刻科に在学した頃の世相は、後に「失われた10年」と称された時代に突入した頃でした。当然、卒業後は紆余曲折があり美術教育の世界へ。細々とですが作家活動も続けつつ、なんとか美術から離れることなくやっています。

人は「なるようにしか、ならない」と、「なるようにして、なる」の間を行き来しながら生きていると感じています。私たちの身辺の事象は、独立しているようでいて実はつながりを持ち、縁と呼ばれるものを形成しています。その中の何を選択するか、しないか、決断の連続です。今とは違う新しい世界の扉を開くのは自由ですが、同時にリスクや面倒を回避して平坦にやり過ごしたい気持ちも生まれます。時には、既に扉は開いており気がつけば飛び込んだ後ということも。それが失敗と思うなら次への学びの機会でしょう。どんな結果も自分が引き寄せたものだから他人のせいには出来ません。その失敗がいつか実を結ぶ糧となると信じて前に進むのみ。いつでも次の扉を開くのは自分自身なのです。

卒業は「いま、ここ」から新しい世界の扉を開き、飛び込む時です。冒頭の言葉に戻りますが、諦めずに自分の中に見つけた「美の世界」へ挑戦を続けてください。続けた時間の分だけ、皆さんにとって大きな価値となるでしょう。

FUTURE EVENT 01

第45回 名古屋芸術大学 卒業制作展

2018年2月17日[土]－25日[日] 10:00－18:00
名古屋芸術大学西キャンパス

卒業制作展記念講演会

「『観光客の哲学』と芸術の使命」
東 浩紀 氏（株式会社ゲンロン代表、批評家）
2018年2月18日[日]14:00－15:30

「“かざり”の生命」
辻 惟雄 氏（美術史学者）
2018年2月24日[土]14:00－15:30

名古屋芸術大学西キャンパス　B棟2階大講義室
13:30開場　入場無料、要整理券（定員200名）

ミニオープンキャンパス

2018年2月25日[日]
10:00－16:00

デザイン：山田真梨子（ORGANデザイン室）

FUTURE EVENT 02

第22回 名古屋芸術大学大学院 修了制作展

2018年2月27日[火]－3月4日[日]
9:30－19:00（最終日は17:00まで）
名古屋市民ギャラリー矢田
（名古屋市東区大幸南一丁目1番10号 カルポート東）

2018 04－09 EXHIBITION SCHEDULE

Open 12:15－18:00（最終日は17:00まで）日曜休館　**入場無料**　どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

- 3/30 金 → 4/11 水 レヴュー選抜展
- 6/ 1 金 → 6/ 6 水 From Denmark 2018展
- 6/ 8 金 → 6/13 水 教員展
- 6/15 金 → 6/20 水 あゆみ。たどりつき。そして/のこぎりやね
- 6/22 金 → 6/27 水 プレソツ展
- 6/29 金 → 7/ 4 水 コミュニケーションデザイン&アート演習発表展
- 7/ 6 金 → 7/11 水 2018年度　前期交換留学生作品展
- 7/13 金 → 7/18 水 スペースデザインコース展/私の椅子・スツール展/芸術教養レビュー
- 7/20 金 → 8/ 1 水 素材展
- 9/21 金 → 9/26 水 先輩・後輩展 ―久野利博と教え子たち―

編集後記

先日、卒業制作展の講演会講師をお願いする辻惟雄さん・東浩紀さんと打合せをするために鎌倉と東京へ出張に行きました。その際にお二人とお話して思ったことは、「芸術で就職することは難しい」ということ。ですが、仕事以外において芸術はあってもなくても支障がないかもしれないけれど、あればその分年をとっても生きていく楽しみが増えます。辻先生のおっしゃった「芸大で勉強したことは社会の中では役に立たないことも多いけれど、人生を豊かに充実したものにするためにはとても大切なこと」という言葉が心に残りました。

市原萌絵（アート&デザインセンター）

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線（地下鉄鶴舞線乗り入れ）徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行一準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分

大学基準協会認定マーク
本学は2011年4月に、大学基準協会の大学基準に適合と認定され、認定評価を再取得しました。
認定期間は、2011年4月から2018年3月までです。
これにより、法令化されている「第三者による認定評価」にも合格したことになります。

名古屋芸術大学 Art & Design Center
NAGOYA UNIVERSITY OF THE ARTS
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　TEL［0568］24-0325　FAX［0568］24-2897
B!e Vol.48
発行日　2018年2月7日

編集・発行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　E-mail adc@nua.ac.jp　URL http://www.nua.ac.jp
2018　Printed in Japan © Art & Design Center, Nagoya University of Arts
デザイン／印刷　サンメッセ株式会社

NAGOYA UNIVERSITY OF THE ARTS
ART & DESIGN CENTER NEWS
48

大学生活４年間の集大成である卒業制作展。これまで勉強してきた成果を発表する、最後のメインイベントです。今年度は会場を名古屋芸術大学西キャンパスに移し、開学以来初となる学内開催を行うこととなりました。展示会場は学生たちが過ごしてきた教室や廊下、体育館や階段などさまざま。作品だけでなく学び舎も見ていただくことができる貴重な機会となります。

展示場所としての使用は想定されていなかった場所に作品を展示するため、学生教員ともども創意工夫を凝らして展示スペースを制作中です。最終日の2月25日にはミニオープンキャンパスを開催し、美術領域とデザイン領域ではワークショップも行います。名古屋芸術大学をこれまで以上に感じていただける卒業制作展になることと思います。気軽に遊びに来て下さいね。

今年度のポスターデザインはアートクリエイターコース1期卒業生の山田真梨子さん。各コースの学生がモデルとなっていますので、イラストと言葉をもとに作品や本人を探してみてください。

Illustration 山田真梨子

卒業制作展
記念講演会

Message to graduates

今年度は会期が例年よりも長いため、講演会を2回開催する運びとなりました。
講師の方から本学の学生、特にこれから社会へ出ていく4年生に向けてメッセージをいただきました。

記念講演会 1

Lecture theme

『観光客の哲学』と芸術の使命

Lecture date　2月18日(日)14時～15時半(13時半開場)

東 浩紀氏

まだ22歳前後、今すぐに将来を決めなくてもこれからまだ何にでもなることができます。大事なことは社会で通用する力を身につけておくこと。具体的にはAdobeのソフトを使いこなせるようにしておくと、この先今以上にコンピュータを使った仕事が増えていく中で必ず役に立ちます。働いてお金を稼ぐときに重要なのは「アイデア＜技術」ということ。迷っている人はとりあえずデジタルの勉強をしましょう！

書籍『ゲンロン0 観光客の哲学』表紙

Profile　あずま　ひろき

1971年東京生まれ。批評家、作家。株式会社ゲンロン代表。同社発行『ゲンロン』編集長。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。専門は現代思想、表象文化論、情報社会論。著書に『存在論的、郵便的』(新潮社、第21回サントリー学芸賞)、『動物化するポストモダン』(講談社現代新書)、『クォンタム・ファミリーズ』(新潮社、第23回三島由紀夫賞)、『一般意志2.0』(講談社)、『弱いつながり』(幻冬舎)、『ゲンロン0　観光客の哲学』(ゲンロン、第71回毎日出版文化賞)など多数。

記念講演会 2

Lecture theme

“かざり”の生命

Lecture date　2月24日(土)14時～15時半(13時半開場)

辻 惟雄氏

デザインは社会と繋がりがありますが、美術は必ずしもそうではありません。勉強したことは社会の中では役に立つとは言い切れないけれど、人生を豊かに充実したものにするためにはとても大切なことです。芸術で生活していくことは難しいことだけれど、作品を作ることが好きで好きで仕方のない人は誰かにそれを見せたい！という欲求が必ずあります。良い作品を作れば必ず見てくれる人が現れて心の支えになります。売れる作品も良いですが、好きなものを作って頑張ってほしいと思っています。

鎌倉にて、大崎正裕芸術学科長(右)とともに

Profile　つじ　のぶお

1932年愛知県名古屋市生まれ。東京大学文学部美術史学科卒業、同大学院博士課程中退。東京国立文化財研究所美術部技官、東北大学教授、東京大学文学部教授、国際日本文化研究センター教授(東京大学併任教授)、千葉市美術館館長、多摩美術大学学長、MIHO MUSEUM館長を務めた。2017年、朝日賞受賞、文化功労者に選出される。著書『奇想の系譜』(美術出版社)を始め、又兵衛、山雪、若冲、蕭白、国芳らを「奇想の画家」としていち早く再評価し、琳派や文人画、円山派などを中心に語られてきた近世絵画の見方を大きく変えた。近著に『奇想の発見　ある美術史家の回想』(新潮社)。

Report 1

2017年度　芸術学部美術領域アートクリエイターコース
アート&デザインセンター企画展

「榊原澄人　記憶の羅針盤」

2017年9月18日[月・祝]－10月1日[日]

『榊原澄人；記憶の羅針盤』の思い出

榊原澄人展はオープニングを迎えるまでの一週間の準備からクロージングまで、関わった私たちは途切れることなく非常にファンタスティックな時間を過ごすことができた。

最も長い壁面一杯に3台のプロジェクターをつなげて上映する「É in Motion No.2」の画面がつながった設置5日目のその瞬間、待ちに待った榊原展が本当に実現したとの感慨が、手伝う私たちの内に満ち、思わず拍手がわき起こった。

2016年の暮れに、はるひ美術館の「榊原澄人；永遠の変身譚」をスタッフや大学院生たちと観に行き、様々な人物やシーンがループしながら流れていく構成に感銘し、学生たちが何度も足を運んで観れるようにADセンターで開催したいとのきっかけになったのが「É in Motion No.2」。

その時、誰かが歌った“時は川　きのうは岸辺”という《時》のメタファーのフレーズを思い出していた。

私たちは皆、《今》が過ぎるとすぐに《記憶》となる名残を置いて先に進みつつ、記憶を辿ったり、忘れようとしたりしている。
榊原さんの《ループ》の映像もその時の流れとしての《記憶》がテーマである。だから、榊原澄人さんの展覧会が決まり、タイトルとして頭に浮かんだのが《記憶の羅針盤》だった。

「É in Motion No.2」には榊原さんの故郷北海道の十勝と現在の住まいがある長野県の飯綱高原の風景が描かれていると聞いた。前者が鯨が打ち上げられている場面、後者は雪の丘で少年が少女と出会う場面。榊原さんが描く場面は、彼の個人的な記憶だけれど、観る私たちはまるで自分の記憶をたどるように、彼の作品を辿って思い出していく、記憶という羅針盤(コンパス)を頼りに、何度も、何度も・・・。

私たちは記憶という海を漂っている。

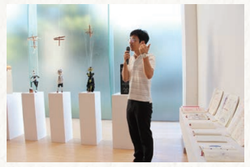
同じように記憶がテーマとなっている加藤久仁生さんのアニメーション「つみきのいえ」では、水の層は底に行くほど過去の記憶として表現されているが、榊原さんの作品に満ちる記憶のエレメントはそれほど簡単には見つからない。それゆえ一度では見つからない記憶の断片を、映像をループモードに切り替えて何度も何度も確かめ愉しんでみる。

8月末にアートクリエイターコースの研修旅行を兼ねて、長野県のおぶせミュージアムの榊原さんの展覧会の最終日に出かけ、飯綱高原のご自宅にも伺い、搬出したばかりのプロジェクターやマリオネット、スケッチブックなどを持ち帰って来た。その際、榊原ファミリー(ヴァイオリニストの奥様と小さくかわいい二人の男の子)がとても暖かく迎えてくださり、設置からオープニングまでの期間も、家族で本学宿舎に滞在され、手伝った皆は、今や榊原ファミリーとの温かい交流の記憶を、彼の作品とともに《記憶》にとどめることになった。

「榊原澄人；記憶の羅針盤」。この記憶の名残だけで、2017年が実りある年だったと記憶していたい、いつまでも。

西村正幸　美術領域　アートクリエイターコース教授

会場風景


榊原澄人氏

「É in Motion No.2」2013年

Report 2

2017年度　芸術学部デザイン領域ヴィジュアルデザインコース
アート&デザインセンター企画展

「GROOVISIONS　NUA」

2017年10月28日[土]－11月8日[水]

この展覧会は大きく二つの要素からなります。一つは、特別客員教授としてお招きした伊藤弘さんが率いるデザイン集団グルーヴィジョンズの作品の展示。もう一つは、名芸学生有志と伊藤さんによるプロジェクトの成果の展示です。

グルーヴィジョンズはカラフルでポップなグラフィックを軸に、メディアを駆使して多彩なコミュニケーションを作り続けてきたグループです。そんな彼らのデザイン作法に触れることが、一つの狙いでもありました。

プロジェクトでは、伊藤さんが提示した「グルーヴィジョンズの展覧会を盛り上げる」という目標のもと、学生が「広報」「グッズ制作」「カフェ運営」のセクションに分かれて具体案を構想。最初はそれぞれ個性を出そうという意識が強く、グルーヴィジョンズの展覧会にどこかそぐわない印象でした。そこで、伊藤さんに仕事の上で大切にしていることなどを伺ったり、マインドマップを作成したりしながら、「グルーヴィジョンズらしさ」とは何かを探究していきます。そこから見えてきたのはグルーヴィジョンズのシンプルで明解な作品は、それを生み出すプロセスやシステム自体をディレクションする手腕から生まれているということでした。普段の課題制作との違いに戸惑っていた学生も、次第に全体での大きなコミュニケーションを意識するようになり、展覧会が具体的に見えてくる頃には、ここまでのプロセスに手応えを得ていました。プロジェクトに参加した学生の一番の収穫は、展示をまとめあげたこと以上に、制作プロセスの中で全体を見渡すディレクションの概念に触れられたことではないでしょうか？

最後になりましたが、粘り強く学生の意見に耳を傾け、導いてくださった伊藤さん、また、このプロジェクトをご支援いただいた多くの方々にお礼を申し上げます。

則武輝彦　デザイン領域　ヴィジュアルデザインコース准教授

会場風景